

Spring Seminar 2018

5th C++ 10 番テーブル 総評

ジャッジ 法政大学 4年 戸田

テーブルメンバー

山村(WESA3) 篠原(成蹊 3) 富永(慶應 3) 山田(慶應 3) 橋本(WESA3)
久保田(立教 3) 矢部(成蹊 2)

春セミお疲れさまでした。ここでは議論の流れとそれぞれの順位の選定理由について書きたいと思います。また、ジャッジの理解とテーブルメンバーの理解にずれがある可能性がありますがお容赦願います。

OP 決めまで

Narrowing は山村によって読まれた。Narrowing において橋本から CCL を得る方法は comparison のみかという Q がなされたが narrowing presenter と大きな見解の違いもなく終わった。OP 決めでは複数の Q ののうち篠原が OP に選ばれた。内容は体罰によって苦しんでいる生徒を救うために体罰を犯した先生を全員免職にするという usual なものである。

→doubt がある者もいたがオピメに自分の doubt がどこのエリアで話すことができるのか聞くことも方法の一つであると思うが、自分で話し方を提示することも必要であるとする。

ASQ

ASQ においては特に大きく意見や理解の食い違いが起こらず進んでいった。基本的な Q や OP の comparison idea に関する Q などである。

NFC

NFC において山田からアーギュメントが出された。内容は「生徒を救うべきではない。なぜなら生徒は法に反すること(暴力、喫煙など)を行っているからだ」というものであった。このアーギュメントの goal は some cut であった。富永、橋本、山村な

どが **some cut** によって何をしたいのか、法に反する行為をすとなぜ救うべきではないのか、法に反するとはどういうことなのかという **Q** がなされていった。最後に橋本によって一旦そのような話は無視しようという **S** がされ富永などの **Q** などにより情報が追加され、後に話すことになった。

→複数の **Q** がなされた後の **S** が突発的なものであると感じた。 **C** が少なかったことによると思われる。 **S** をするには **reason** を詰めて確実に乗ってもらえる状態にしたい。

APA

Mandate において大きな **Q** はなくプラカへ入っていった。

Practicability

practicability において富永によってアーギュメントが提示された。今回の議論において1時間以上富永のアイディアの検証がなされ、検証途中で議論が終了した。アーギュメントの内容は **M** は全ての教師を免職にするというものであることで **M** は違憲であり、さらに良い **M** が存在するから **practicability** がないというものであった。違憲の内容は教育を受ける権利が侵害されるなどである。今回、検証中においてより良い **M** の話はほとんどされず違憲についての議論がなされた。篠原、山村、橋本、山田を中心に主に出てきた内容は「違憲とは何か」「先生が減ることによる影響は何か」「違憲というのはどのような状態か」「**practicability** の **task** に憲法違反は関係してくるか」といった内容である。最終的には富永によって **practicability** の **task** において歴史的に見て違憲であるかの話は必要であるといった話がなされた。

→今回の検証の感想として富永の思い通りに物事が進んでしまったことが原因で長引いてしまったと思われる。それぞれがどういった方法で話そうとしていたかはわからないが果たして **idea** に対する疑問を解消できていただろうか。もちろん **idea presenter** の意見を聞くことはとても重要なことであると思う。意見を聞かずに **intention** と違う解釈をしてしまうことは議論の停滞を生む原因となるからだ。しかし聞いて理解することは大切であるが自分の中で話すべき内容であるかは考えるべきであった。今回の場合、私の個人的な意見ではあるがそもそもの話として「**M** は違憲なものなのか」「違憲であっても本当に **practicability** がないのか」というところの疑問を解消したかった。もちろん改善の余地は大いにあるが富永は **idea presenter** として自分の **idea** によって議論の流れを変えられたことはよかったであろう。

順位と選定理由

まず初めに 1 位から 4 位まで非常に僅差であったことを記しておく。

1 位：富永（慶應 3）

コンスタントな介入、Q のみならず suggestion などを駆使してテーブルに貢献していた。議論の基本的なことはすべて一人で行える能力はあったと感じた。しかしながらアッセンに向けてはもう少し全体的な能力を向上させたい。カンファメーションを行いながらスムーズに S まで持っていける力を身に着けることができれば圧倒的 1 位として議論を進めていくことができたのではないかと思う。

2 位：山村（WESA3）

質の高い Q が多く 2 位に選定した。Q の内容はのちのつながる可能性の大きいものであったが自分で形にすることができなかった。様々な Q ののち C なり S なりにつなげてくことで Q の価値も見いだせると思う。質の高い介入をのちの議論に活用できるようになればさらに順位を上げることができたと思う。アッセンに向けて改善して欲しい。

3 位：篠原（成蹊 3）

OP として議論に貢献したこと、アーギュメント時の介入を評価し 3 位に選定した。篠原はプレゼンがうまく、発言が浸透していた。その影響からか今回のテーブルにおいて一番 authority を持っていたように感じた。しかしながら発言の多くが自身の OP の説明になってしまっていることが多いとも感じた。アッセンに向けてカンファメーションが一番伸びる要素になるのではないかと思われる。

4 位：橋本（WESA3）

適度なカンファメーションとユニークな S を評価し 4 位に選定した。カンファメーションのタイミングは絶妙でありまたプラカのアーギュメントにおいて「インターネット授業を導入しよう」というユニークな S を行っていた。結局採用されなかったが、S をしたことに意味があるといえる。アッセンに向けてカンファメーションにおいては旧情報の確認とともに新情報も付け足しながらカンファメーションをしていくといいだろう。S についてはやはり乗ってもらうことに越したことはなく idea presenter の意図を考えた S ができると心がかかることが重要である。

5位：山田(慶應3)

適度な介入とアーギュメントを評価し5位に選定した。アーギュメントやQによる介入は真っ当なものばかりであった。しかしながら **understanding** の部分でついていけないことがあった。またアーギュメントはどのような目的で出したか不明ではあるがもう少し浸透に努めてもいいのではないかと思う。アッセンに向けて、自分一人でSまで持っていけるような力を身に着けたい。

6位：矢部(成蹊2)

複数のQを評価し6位に選定した。アーギュメントにつながるようなQを2.3回行っていたが、Qのみで終わってしまった。2年生の段階でアッパーに残ることはアッセンで乙一を狙える位置にいると思う。アーギュメントを中心に第三者介入のスキルを磨いてアッセンまで頑張ってもらいたい。

7位：久保田(立教3)

発言がなかったため7位に選定した。試ジャッジ期においてSを行っていたことなどからみるともっと上を目指したのではないかと思う。アッセンに向けて積極的な姿勢を取り戻して目標に向かって頑張ってもらいたい。

最後に

改めて春セミお疲れさまでした。このテーブルを見て思ったことは全員アッセンでは乙一以上のランクをとる実力があるということです。2年生にとっても3年生にとってもアッセンは頑張ってもらいたいです。

2年生にとっては来年につながる大会になります。乙一をとるか乙二で終わってしまうかによって周りの印象は大きく変わるからです。それ以外にも自分に自信がつく、秋以降の大会で上手い2年生同士でテーブルを組むことができるなど良いことがたくさんあります。年に何回もディスカッションする中で順位を争うことは春セミアッセンの合わせて2~3か月しかないからこの期間だけは順位を争いながらのディスカッションを楽しんでみてください。

3年生にとっては最後の順位がつく大会です。引退した今、改めて思うのは順位を争うことのできる大会は4回しかなく貴重だったということです。僕は結果に納得して終わることができましたが3年生は挽回できる最後のチャンスだと思って終わってから後悔の無いようにしてほしいです。また、今まで約2年間取り組んできた活動にランクとして名前を残すことができれば大きな達成感を得られると思います。

何か疑問など聞きたいことがあればあまりとがりのないことを言えると思うので聞いてください。